輸血医療における効率の良い管理業務

◎古賀　嘉人[1)]
長崎大学病院　細胞療法部[1)]

一昔前と比べると輸血部門の業務は広がりを見せ、それに伴い業務量が増大している。輸血関連検査および血液製剤管理業務のほかにも、クリオプレシピテート調製や製剤分割などの製剤調製業務、HLA 検査等の移植関連検査業務、細胞治療・再生医療・遺伝子治療に関わる細胞調製業務に輸血部門の技師が関わることが増えてきている。ルーチン業務が拡大する中、上記以外のいわゆる管理業務の効率化について考える。

管理業務は幅が広く、毎年恒例の業務量アンケート調査や定期的に開催される輸血療法委員会の統計資料作成、新しい業務の運用構築とシステム設定、緊急輸血トレーニングや時間外の当番技師の教育訓練など多くの業務がある。

中には、複雑な条件で集計をする業務やシステムのマスタ設定作業など専門性が伴う業務もあり、それらはいつも同じ技師が担当するといった状況になることがある。これは業務の属人化と呼び、「業務が特定の人のものとなり、その人しかわからない/できない状態になってしまうこと」である。平時は問題ないと思いがちだが、異動や退職、長期不在となったときに誰も対応できず業務が滞ってしまうリスクがある。業務の属人化をできるだけ避けるためには、①マニュアルを整備し標準化する②スタート時から複数の担当を置きワークシェアする③業務を定期的に次のスタッフへ移管していくことなどが必要と考える。

また、各業務やプロジェクトの緊急性、進捗状況について全員が把握できるよう、タスク・プロジェクト管理ツールなどを利用することも円滑な管理業務の一助となると思われる。

このようなことの積み重ねでスタッフ全員がマルチプレイヤーとなり、個々の力だけでなくワンチームで互いにフォローしあいながら業務を遂行することが効率化に繋がると思われる。